

Title	「1572 年の規約」について：サン・バルテルミー直後のフランス・プロテスタントの一断面(下)
Author(s)	和田, 光司
Citation	聖学院大学論叢, 14(1): 163-184
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=485
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「1572年の規約」について

——サン・バルテルミー直後のフランス・プロテスタントの一断面（下）——

和田 光 司

The Constitution of 1572

——A Perspective on the French Protestants after the Saint Bartholomew's Day Massacre——

Part III

Mitsuji WADA

The Province of Languedoc consisted of two regions, Le Haut Languedoc (western) and Le Bas Languedoc (eastern), which had different characteristics: . The constitution belongs to the urban Protestants of the former, who fiercely resisted the noble Protestants of their region. Other similar tendencies can be found: urban democratic opposition to the royal courts, the influence of the presbytery, autonomous urban defense, antipathy to the Protestant Princes, etc.

第三章 史料の成立（二）、一成立の背景一

1, ラングドックの東と西

これまで我々は、問題の規約が1572年秋にラングドックの新自衛組織において成立したこと、しかしその規約は先行するプロテスタント地方三部会（以後地方三部会と略）とは性格を異にすること、等を確認してきた。では、地方三部会から規約を通して全国政治会議へ、という単系的な連続性が否定されたとして、我々は全国政治会議の成立史をどのように構想し直せばよいのであろうか。

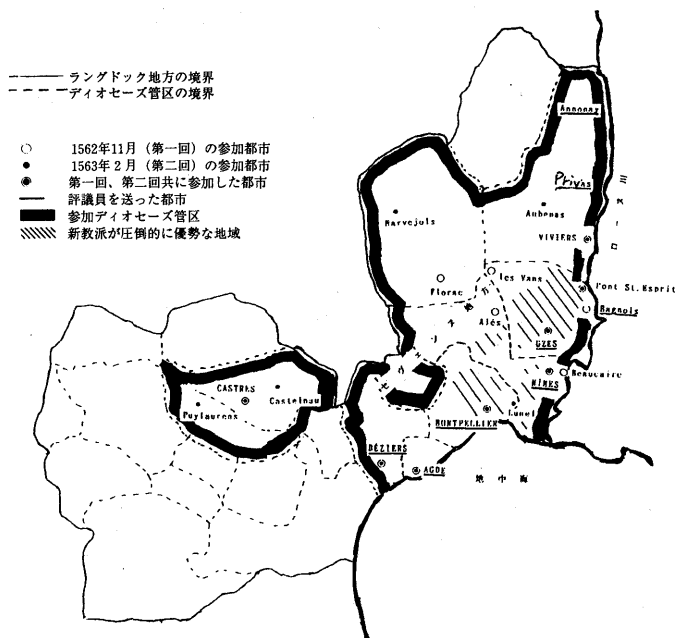
従来の学説では、1572年を境として、「新自衛組織」が「地方三部会」活動を継承し、これに代わった、と理解されてきた。しかし実は、1572年以前において、地方三部会はラングドックの全域を代表していたわけではなく、新自衛組織も、従来の定説とは異なり等質だったわけではない。結論を先に言えば、成立史において第一義的に重要であるのは、ラングドック東部の低ラングドック地方（以後東部と略）と西部の高ラングドック地方（以後西部と略）という対比であり、地方三部会や新自衛組織はこの新たな枠組みの中で捉え直されなければならないのである。

まず、1572年以前の状況から検証しよう。果たしてこの時期のラングドックは、地方三部会の活

Key words; French Protestants, Saint Bartholomew's Day Massacre, Languedoc, Provincial Estates, Urban Democracy

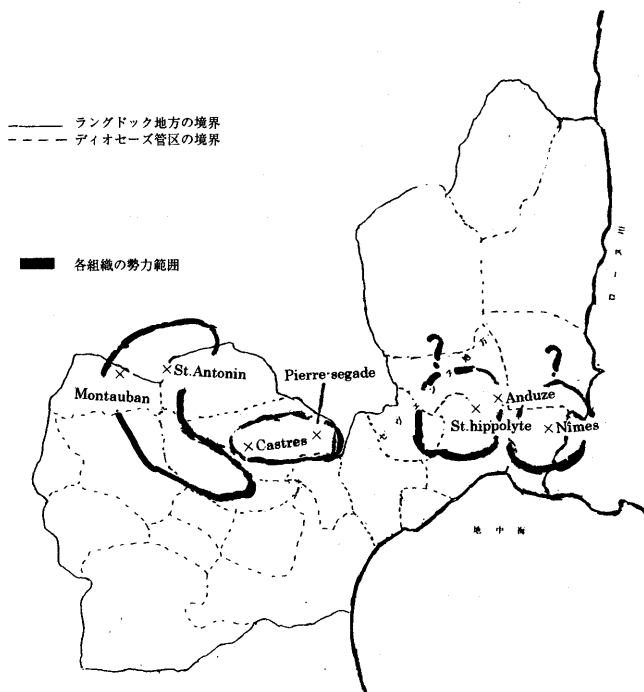
「1572年の規約」について

図3 第一次宗教戦争期のプロテスタント地方三部会



拙稿「フランス・プロテスタントの地方三部会活動、—ラングドック、1562-1563を中心に—」
 『文学研究科紀要別冊，哲学・史学編』19，早稲田大学大学院文学研究科，1992，86頁より。

図4 サン・バルテルミー直後の新自衛組織



「1572年の規約」について

動によって完全に覆われていたのであろうか。図3を参照されたい。これは、第一次宗教戦争期に、地方三部会に代表を送った地域（ディオセーズ管区）を示すものである。その重心は、明らかに東部に偏っており、西部はこれに殆ど関与していない。第二次宗教戦争以後は、西部はもはや代表を送ることはない。地方三部会の勢力範囲には、明らかに地理的偏差が存在したのである。

次に、1572年秋の状況に目を移そう。この時期ラングドックの各地において原初的な軍事組織が発生していた。現在、以下の場所で会議が開催されたことが判明している（図4参照）⁽¹³⁰⁾。

ピエールスガッド（Pierresegade, Viane郊外）

サン・アントナン（St.Antonin）

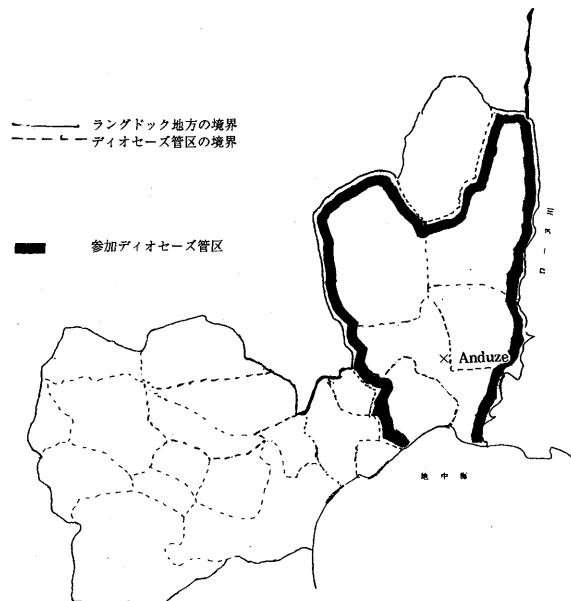
ニーム（Nîmes, 10月31日）

サン・イポリット（St.Hippolite, 10-11月）⁽¹³¹⁾

研究者たちはこれらの会議が基本的に等質であると考えてきた。規約の成立についても、これらを集团的に一括して、その形成母体と見なしてきたのである。例えばギャリソンは、規約がこれらの会議において回覧に付されつつ徐々に形成された、と推測している。しかし、実はこれらの新自衛組織もまた必ずしも等質ではなく、東と西とでその性格は大いに異なっていたのである。

注目すべきは、東部のニームとサン・イポリットの両会議が発展・合流した、翌年2月のアンデューズの会議⁽¹³²⁾である（図5）。この会議は、実は新たな性格を持つものではなく、かつての地方三

図5 アンデューズ会議（1573）の勢力組織



部会の再建に他ならない。その勢力範囲は、以前の地方三部会のそれと殆ど変わってはいない。また議事録は、アンデューズに集まったのは「個人の資格で、或いは代表を通して召喚された、改革宗教を奉ずる貴族、及び第三身分のラングドックの住民」であると主張する。これは自分たちが正当な地方三部会であることを主張したものであり、以前のプロテスタント地方三部会にも見られたものである。また議事録は、制度、主導階層、武装蜂起の言説などに関しても、以前の地方三部会との基本的な連続性を明証している。このように、東部に成立した地方三部会はサン・バルテルミーの後も存続し、その支配領域を維持したのである。

規約の成立について言えば、ニームとサン・イポリット両会議の議事録は残されていない。しかし、このような地方三部会の強靱な連続性を考慮するならば、両会議は基本的にその延長線上にあり、規約の成立母体である可能性は低い、と考えるのが妥当であろう。他の側面からも、この可能性は低いと判断される。実際のところ、もしこれらの会議で規約が成立したとするならば、従来の政治的伝統との断絶の故に、これらの地域のプロテスタントにひとかたならぬ政治的動乱が生じたはずである。しかし、同時代の重要史料には、そのような徴候はほとんど見ることはできない⁽¹³³⁾。

次に西部に目を移そう。規約が西部の諸会議で成立したものであることは、ほぼ確実であろう。それは、後述するように、これらの会議の状況と規約との間に見られる親和性からも明らかである。しかし、西部と規約との関係は、より本質的なものであるように思われる。実は、規約の諸特質は、東部とは異なる西部自体の個性として、単にサン・バルテルミーの後のみならず、それ以前の西部の状況においても同様に見出すことが可能である。ただし、基本的に都市が貴族を制圧していた東部とは異なり、西部においては両者が激しく拮抗し続けていた。そのため、西部全体を都市に代表させることはできず、次のように言う方がより正確であろう。規約は、西部のプロテスタント都市がサン・バルテルミー以前から有していた個性が、虐殺の危機的状況によって端的に表出したものに他ならない、と。西部ラングドックが、パリからのサン・バルテルミーの影響を最も激しく受けた地方の一つであることを、特記しておこう。全国政治会議の成立史は、東部の地方三部会的伝統、規約に代表される西部の都市的伝統、及び西部の貴族的伝統という、三つの要素によって再構成されるべきものなのである。その具体的過程については別の機会に譲るとして、本稿においては、以下、西部のプロテスタント都市と規約との親和性を検証していくことにする。特に一次史料として用いたのは、宗教戦争期のラングドック西部の基本史料として最も良く知られている、カストル市民ガッシュ（Jacques Gaches, 1555頃—1644）及びフォーラン（Jean Faurin, 1540頃—1602）の日記である⁽¹³⁴⁾。

2、モンターバン・カストルの市政

西部のプロテスタント都市を代表していたのは、モンターバンとカストルである。両者は多少の性格の相違を有しつつも、共にこの地域のプロテスタント諸都市を主導する存在であった。都市と

外部との関係は次節で論ずることとし、ここではまず両者の内政を検討する。ただし、市制度を包括的に解説することはせず、両都市、あるいはその一方において、民主的都市政体、非市民層の政治参加、市政に対する長老会の影響力、国王裁判所との対抗、といった規約の諸特質が見られることに議論を留める。また、軍事司令官の任命に関しては、次節に含めることとする⁽¹³⁵⁾。

1. 民主的都市政体

寡頭制の進んだ東部とは異なり、モントーバンやカストルにおいては、市民総会を中心とする直接民主制への傾向がまだ強く残存していた。先述のように、規約は必ずしも狭義の直接民主制を志向したものではないが、それと親和的であることは否定できないであろう。

モントーバンでは、時代の趨勢にもかかわらず、宗教戦争の時期においても市民総会 (le conseil général) が残存していた。6名のコンシュルは24名からなる市参事会によって選ばれたが、この市参事会員のメンバーは市民総会によって選ばれた⁽¹³⁶⁾。この都市では民衆の政治参加の傾向が極端に強く、ギャリソンは、「ここではコンシュルも長老もその権威がなく、皆があたかも一つの家族であるかのように見なされていた」と述べている⁽¹³⁷⁾。市内の危険分子に対するコンシュルの処罰が弱気と受け取られた時には、しばしば民衆自身による裁判が開かれている。1585年に至って始めて、市民総会の定員が30名に制限されるが、民主化への反動が絶えず存在し、この体制も極めて不安定なものに止まった。

サン・バルテルミーがフランスのプロテスタント都市に及ぼした影響は、カストルにその最も顕著な例の一つを見出すことができる⁽¹³⁸⁾。同市では既に市政の寡頭化が進んでいたが、虐殺の衝撃を受けて、急進化の動きが一気に噴出することとなった。市政を代表するのは4名のコンシュルと24名の参事会員であったが、サン・バルテルミー以前には、その選出は前任者に委ねられていたため、市政担当者の閉鎖化が既に現れていた⁽¹³⁹⁾。市民総会 (le conseil général) はもはやこの選出に関与せず、形骸化し、開催は稀であった。サン・バルテルミーの後、この都市は一時的にカトリックの支配下に入るが、2年後の1574年8月26日、プロテスタントは奇襲によって再びこれを占領する。この後市民総会は復活を見、頻繁に開催された⁽¹⁴⁰⁾。これらの会議においては、都市制度のラディカルな改編が討議され、市政役人の選出は、従来の指名制から市民総会による直接選挙に戻されることとなった。

2. 非市民層の政治参加

モントーバンでの状態は不明であるが、カストルにおいては、サン・バルテルミー後の民主化の激動のただ中にその顕著な例を見出すことが出来る。上記の市政役人の選挙は8月28日に行われたが、単に市民のみならず、カストルの「全住民 les manans et les habitants」の多数決で決定された⁽¹⁴¹⁾。「全住民」の参加は翌1575年の選挙まで見られた。

ただし、このような市政の民主化が、はたして、規約にあるような農村部住民の広範な参加を含んでいたかは、疑問である。少なくともカストルの場合には、現存する史料には表れていない。また、モントーバンでは、戦争の経過に伴い、財政上の必要や糧食の確保などから、むしろ周辺部への支配を強化する傾向が見られている⁽¹⁴²⁾。

3、市政に対する長老会の影響力

東部のニームやモンプリエにおいては、長老と市政担当者とは社会層が異なり、両者の間に階層間の対立が存在した。しかし、モントーバンやカストルでは、両者は国王役人、弁護士、公証人、商人等の同一の出自に属し、市政において緊密な協力関係を築いていた。ギャリソンによれば、モントーバンでは、そのような出自の等質化による協力関係は特に1567年頃より顕著になるという。民衆への対抗上、コンシュラと長老会が支配層としての一体的な関係を築き、1585年以後はこの協力関係において寡頭制の形成を試みることになる⁽¹⁴³⁾。

カストルでは、長老会の設立は、1562年の第一次宗教戦争下でのプロテスタントによる都市制圧を待たねばならなかった。制圧後、長老会は新たに選ばれた市政担当者と協力して、市のプロテスタント化を進めている⁽¹⁴⁴⁾。また、サン・バルテルミー後の再占領の直後、まだ市の体制が確立していない混乱期においても、長老会が市内の秩序化に主導的な役割を果たしたことが知られている⁽¹⁴⁵⁾。以前のカトリック占領下においてプロテスタント内部に存在した穏健派と急進派との対立が、この時期に表面化したのであるが、フォーランは、長老会がこの両者の和解に大いに尽力した、と記している。

4、国王裁判所との対抗

国王役人からの自立も、モントーバン、カストルの両都市において見られる。まずモントーバンであるが、この都市には、ケルシーの六つのセネショセー裁判所の一つが、その座を置いていた⁽¹⁴⁶⁾。しかし、この裁判所は市当局に対する後見を未だ確立しておらず、市政の実権は市当局によって維持されていた。宗教戦争の開始により、裁判所の機能は停止する。サン・バルテルミー以後も、1574年に活動を再開するが、2年後に中断し、以後ナント王令まで間欠的に機能したにすぎなかった。

カストルにおいては、国王裁判所からの自立化の動きは、サン・バルテルミー後の市政の民主化と機を一つにしている。この都市にはトゥールーズ高等法院管轄下のセネショセー裁判所が存在し、早い時期から市政への後見を確立していた⁽¹⁴⁷⁾。先述の市政役人の選挙に関しても、4名のコンシュルについては、裁判所はこの選出に直接関与していた。すなわち、前年度の市参事会が各身分に対して3名、計12名の候補者のリストを作成し、国王役人たちがこの提出されたリストの中から4名の選出を行う慣例となっていたのである。しかし、その慣習は1574年の再占領において廃止を見る。

コンシユルの選出は市民総会の直接選挙に委ねられることとなった。また、後述するところであるが、この年に首席裁判官（juge mage）の職を巡る二名の国王役人の激しい争いが生じ、市参事会、果ては地方総督や正規の地方三部会をも巻き込んで、数年の間続くことになった⁽¹⁴⁸⁾。この事件も、国王裁判所からの市政の自立化を助長したであろうと、推測される。

3、モントーバン・カストルの軍事活動

以上、市政の側面についてモントーバン、カストル両都市と規約との類似性を検討してきた。次に宗教戦争時の軍事活動の側面における類似性について、本節ではまず都市自体による軍事司令官の任命と監督、及び都市同盟の形成について検証する。

1、都市防衛の自律性

まずカストルであるが、この都市においては都市自身による軍事司令官任命の伝統が強固に存在したことが、残された史料から明瞭に窺われる。プロテスタントは、戦争以前に有力者を中心とした自衛のための評議会（conseil）を形成しており、これが後の軍事組織の基盤となる⁽¹⁴⁹⁾。この都市部のプロテスタントと周辺のプロテスタント小貴族との間には緊密な協力関係が成立しており、両者は一つのまとまった地域集団を形成していた⁽¹⁵⁰⁾。誤解を避けるために一言述べておけば、この小貴族は基本的に都市部のプロテスタントと利害を同じくし、いわば都市の延長部分と見なされるものであり、後に述べるであろう都市と対立する貴族集団とは別物である。戦争が始まると、かねてから評議会に要請されていた小貴族は、近隣から軍勢を集め市に流入し、これを制圧する。そして、小貴族の領袖であるフェリエール⁽¹⁵¹⁾が、市庁舎における市民の集会において都市の「総督 gouverneur」に選出された。全く同様の事態が第二次宗教戦争の勃発時においても繰り返され、フェリエールが選出される⁽¹⁵²⁾。第三次宗教戦争の記述は残されていないが、第四次におけるサン・バルテルミー後の再占領においても事情は前二回と同様であった⁽¹⁵³⁾。この度に関しては、選出がなされた集会は「市民総会」であったと日記に明記されている。このように、都市司令官選出の主導権は周囲の小貴族ではなく、あくまでも都市の側にあった。それは、第二次宗教戦争の最中に、カストルの総督として他の者が上位より任命・派遣された時に、都市があくまでもフェリエールの選出に固執したことからも明白である⁽¹⁵⁴⁾。

しかし、カストルにおいては、規約にあるような司令官の一年任期の規定は見られない。また司令官を監督する評議会の制度も、規約とは異なる。規約においては、司令官の統制を行うのは、市政の執行部に当たる24人評議会であった。一方、カストルでは、執行部が単純に総督を監督するような構造にはなっていない。ここでは、総督の下に軍事評議会（Conseil militaire）と行政評議会（Conseil politique）の両者が設けられた⁽¹⁵⁵⁾。前者が近隣の小貴族を集めたものであるのに対し、後者は市当局の側を代表し、プロテスタントのコンシユルを中心にして、他の有力者や財務係を加

えていた。両者の役割分担は明瞭になされている。軍事活動の実際を討議するのは軍事評議会であり、この下に周辺から流入した軍勢と市民が都市防衛に組織された。一方、行政評議会はその財政面といわゆる市政の実際を担当しており、規約に見られるような司令官の直接的統制というモチーフは弱かった。以上のように、カストルにおける司令官の統制は、規約の規定に見られる程厳格ではない。これは、都市と周辺の小貴族が比較的良好な関係を保っていたためと考えられる。

モントーバンについても、都市防衛に対する自律的傾向は顕著であった。この都市については、後に他権力との関係の個所で一括して論ずることとする。

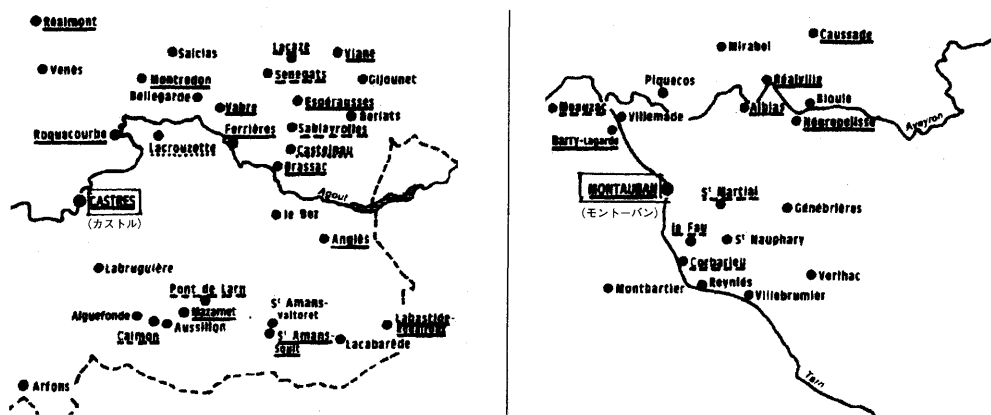
2. 都市グループの存在

規約においては、中央の組織を備えつつもあくまでも各都市の主体性を前提にした、緩やかな都市連合が想定されていた。先にサン・バルテルミー直後に発生した原初的軍事組織について述べたが、このうちラングドック西部で成立したもの、すなわちピエールスガッドとサン・アントナン両会議については、このような規約の内容との間に類似性を見出すことが可能である。しかし、この問題については次節で詳論することとし、ここでは、これらの会議がサン・バルテルミーの後に突如として生じたものではないことに注目したい。既に宗教戦争開始時より、ある種の緩やかな軍事的グループが存在していたのである。両会議はこの軍事グループを基盤として、その連続性の上に成立したのであった。

以下、状況が比較的詳細に把握できるカストルの事例を中心に、この問題を検討していく。

この軍事グループの背景となったのは、地域的な教会ネットワークである。カストルは、市中での新教勢力の確立の後に周辺地域にも宣教師を派遣し、宣教活動を活発に行っていた。その結果、周辺の小都市や村落には、ギャリソンが星雲状と形容する教会集団が形成されるに至る（図6）⁽¹⁵⁶⁾。

図6 カストル・モントーバン周辺の教会グループ



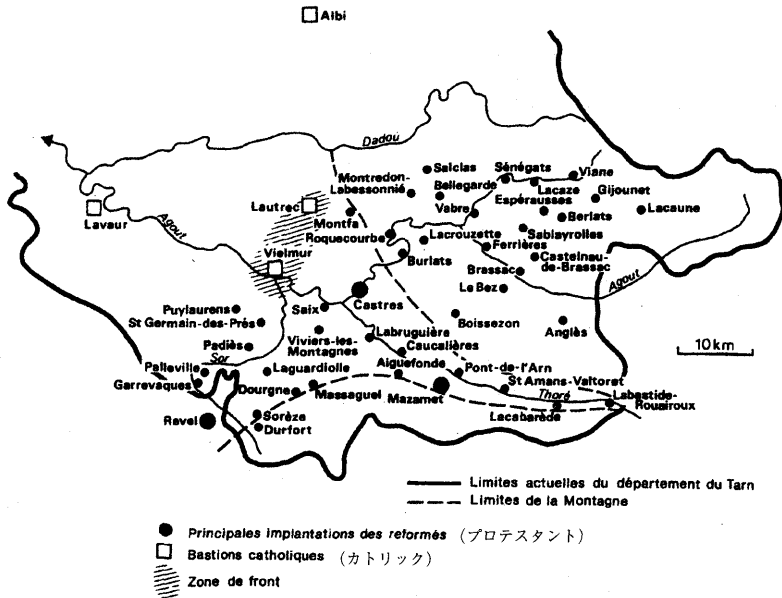
(J.Garrisson, *Protestant du Midi*, Toulouse, 1980, p.55)

「1572年の規約」について

集団内部の諸教会は常日頃より協力関係を密にしており、全国的教会組織の基礎単位である地区教会会議 (colloque) を形成していた。これらの教会の中には、単に信徒の自発的形成によるもののみならず、先述のプロテスタント小貴族が領地内に設立した領地教会 (église de fief) も含まれていた。小貴族もまた、ネットワークを通して、近隣の教会と連絡を取り合っていたのである。

戦争が接近しカトリックとの緊張が高まると、カストルや周辺の教会においても自発的な自衛組織の形成が見られた。戦略上の要点でもあるカストルでは、プロテスタントが優勢ではあったが未だ圧倒的多数には至っておらず、開戦早々に市内を軍事制圧することが不可欠であった。このため、宗教戦争が始まるとカストルの自衛組織はネットワークを通じて周辺の小貴族や小都市に呼びかけ、その協力の下に市を占領する⁽¹⁵⁷⁾。流入した周辺の小貴族は占領後も市内に止まり、市民と協力して市の防衛体制を組織した。市の主導による司令官の選出等、この辺の事情は先ほど述べた通りである。ところで、小貴族の流入による市の制圧と、市民との協力による自衛体制の組織化というこの現象は、より小規模ではあったが近隣の小都市においても同様に見られた。また、その占領計画はしばしば互いに連関していた。このようにして、カストル周辺では諸都市による緩やかな軍事的グループが形成されたのである (図7)。第二次宗教戦争の開始時においても同様の状況が繰り返

図7 カストル周辺の軍事拠点



(R.Cazals éd., *Histoire de Castres, Mazamet, La Montagne*, Toulouse, 1992, P.122)

され、周辺貴族の流入によって、カストルと周辺のマザメ、リアルモン、ロンベールが同日中に占領された⁽¹⁵⁸⁾。

この軍事グループの規模は規約の発想に近いものであったが、規約とは異なり、制度として組織化されたものではなかった。正式の同盟の契約もなければ、規約もなく、諸都市間の協力はいわば自然発生的な段階に止まっていた。よって、規約に見られるような諸都市の上位に立つ中央機構も未だ存在していない。このようなグループの制度化は、サン・バルテルミー後のピエールスガッドやサン・アントナンの会議を待たねばならない。

しかしこの前段階においては、むしろ規約にも共通する緩やかな都市連合体としての性格にこそ、注目すべきであろう。軍事グループにおいて、各都市の軍事活動は基本的に独立しており、司令官も各都市において選ばれている⁽¹⁵⁹⁾。緊急時においてのみ、他都市の援軍が要請されるにすぎない。第二次宗教戦争における諸都市の同日占領も、互いに連絡はあったとはいえ、互いに独立したものであった⁽¹⁶⁰⁾。確かに、カストルはその軍事力の比重により、諸都市の間で中心的役割を担っていた。カストル以外の小都市や村落は、城塞や兵力の規模において到底これに匹敵せず、カストルの市民軍が他の周辺都市の防衛の責任をも自覚していたことは、明らかである。地域内のカトリック都市や要害への攻撃も、カストルの軍が中心となり、これに随時近隣の兵力が加わっていた。しかし、このようなカストルの軍事的活動は近隣諸都市の軍事的自律性を損なうものではなく、覇権主義の傾向は殆ど見られなかった。

ところで、カストル周辺で見られたような星雲状の教会集団は、総じて有力なプロテスタント都市一般に見られたものであり、東部のニームやモンブリエにも同様に存在した⁽¹⁶¹⁾。しかし、東部においては、このような教会組織とは別に、むしろこれを押さえ込む形でプロテスタント地方三部会組織が成立する。よって、地域的軍事組織の基盤となったのは、西部のような教会ネットワークではなく、三部会の下位機構であるディオセーズ管区やヴィーグリー管区(viguerie)の租税割当会議であった⁽¹⁶²⁾。

4、他権力との関係

これまで我々は、市政や軍事組織を巡って西部のプロテスタント都市と規約との類似性を確認してきた。では、これらの都市と外部の諸権力、すなわちプロテスタント地方三部会や地方のプロテスタント貴族、そして親王とはどのような関係にあったのか。まず、プロテスタント地方三部会との関係から考えてみたい。

1、プロテスタント地方三部会との関係

モントーバンを例外とすれば、少なくとも第一次宗教戦争においては、ラングドック西部はプロテスタント地方三部会の権威の下にあったと考えられる。カストル及び隣接するローラゲ地方のプロテスタントはプロテスタント地方三部会に代表を送っている(図3)⁽¹⁶³⁾。また先述のカストルの軍事グループは、内戦勃発の緊張の中で市内の占領の準備を進めたが、プロテスタント地方三部

会の長であるクリュッソル伯の命令を待って初めて占領行為に及んだのであった⁽¹⁶⁴⁾。

しかし、この地方三部会体制はあくまでも東部のプロテスタントの覇権を確立するものであり、西部はその衛星に止まるにすぎなかった。プロテスタントが模倣した本来の地方三部会においては、ニーム、モンプリエという東部のプロテスタント大都市が上席を占める一方で、モントーバン、カストルといった西部の小規模なプロテスタント都市は下位に止まっていた。東部のプロテスタントは、自前の地方三部会を設立するに当たり、当然ながら席次をそのまま踏襲したのである。このプロテスタント地方三部会においては、執行部である評議会に代表を送った都市は全て東部であり、西部は実質的な意志決定から除外されていた。軍隊維持のための貢納金が課せられる一方で、その恩恵を受けることはほとんどなかった。河川交通の影響により、宗教戦争開始時より東部と西部はそれぞれ別の戦域の形成を余儀なくされていたからである⁽¹⁶⁵⁾。第一次宗教戦争においては、地方三部会の長のクリュッソル伯が一度モントーバンを視察に訪れただけで、東部の軍は西部にほとんど関心を払う余裕がなく放任されている⁽¹⁶⁶⁾。むしろ、西部はガロンヌ川を通してギューエンヌやガスコーニュ地方のプロテスタントとの関係を強めることになる⁽¹⁶⁷⁾。

こうして、第二次宗教戦争においては、西部はもはや地方三部会に代表を送ることはなく、軍事行動もその権威の下にはない。状況克服のため、地方三部会はカストルの軍事グループに初めて手下の貴族を指揮官として派遣するが、離脱の傾向を押し止めることはできなかった⁽¹⁶⁸⁾。平時において地方三部会の内部課税の対象となったのは東部のみであり、西部の諸都市の名はもはやみられない。地方三部会は西部のプロテスタントの取り込みを断念したのであり、続く第三次宗教戦争においては、もはや地方三部会と西部の都市の正式な接触は成されていない。

ところで、西部一般の態度が積極的な敵対というよりも漸進的な離反であったのに対し、モントーバンのみは当初より極めて否定的態度を取っていた。この都市はプロテスタント地方三部会へ一度も代表を派遣しておらず、そもそもラングドックへの帰属意識自体が希薄であった⁽¹⁶⁹⁾。同市は、本来、狭義のラングドックではなく、ギューエンヌの一部である低ケルシー地方（Bas Quercy）の首都であり、正規のラングドック地方三部会への参加は、この地の司教に追従した受動的なものにすぎない⁽¹⁷⁰⁾。プロテスタントの教会組織においても、宗教戦争以前よりギューエンヌ地方教会会議に所属し、ラングドックとは距離を置いている。

モントーバンは歴史家がしばしば「共和国」と比喻するように、政治的自立への志向が極端に強い都市であり、国王以外のいかなる上位権力も嫌悪した。コンデやナヴァール王などのプロテスタントの首領さえも、その例外ではない。後の1585年のことであるが、ナヴァール王から都市総督として送られた有力貴族のデュプレシ・モルネーは、この都市はナヴァール王にもその代官にも敬意を払わない無秩序の町である、と嘆いている⁽¹⁷¹⁾。彼自身の妻もまた、その服装が宮廷風で華美であるとして市の長老会から破門の宣告を受け、貴族のプライドを大いに傷つけられることとなった。上位からの課税が問題となれば、市民の反発は頂点に達した。都市は親王たちと対等に渡り合い、

負担額の減免を獲得している。また、都市総督の追放もしばしば見られた⁽¹⁷²⁾。このような上位権力への嫌悪は、親王や大貴族を介さない国王との直接交渉を志向させた。第一次宗教戦争終結後、ギャリソンの言葉を借りれば「3度にも亘る攻囲戦を失敗に終わらせ、モンリュックのような恐るべき武將を退けたことによって、モントーバンの自負は頂点に達し」、コンデが締結した和平条約への不満を訴えようと、二名の代表を国王顧問会議に直接派遣する⁽¹⁷³⁾。王室はこの「尊大な態度」に激昂し、カトリヌ・ド・メディシスは彼らの投獄を命じた。このように、モントーバンの独立自治の気概は相当なものであったが、その彼らの目には、東部の覇権を意味するプロテスタント地方三部会が断固として拒絶すべきものとして映ったことは確実であろう。モントーバンの態度は地方三部会からの離脱を進める他の都市にも影響を与えたに違いない。

以上のように、東部のプロテスタント地方三部会に対し、モントーバンは積極的に拒絶し、他の地域は漸進的に離反していった。しかし、彼らは単に東部の覇権、あるいは東部流の地方三部会のみを反発したのではない。すなわち、規約に見られるように身分制議会による地域の組織化それ自体への反感が存在したのである。しかし、この点を明らかにするには、西部のもう一つのプロテスタント勢力である地方貴族との関係に目を転じなければならない。

2. 地方貴族と地域統合

第一次宗教戦争期のラングドック西部には、地域全体を実質的に統合する軍事組織なるものは存在しなかった。カストル・モントーバン両市はそれぞれ比較的大型の星雲状グループを組織し、他のいくつかのプロテスタント都市にも、より小規模な星雲状グループを組織するものがあつた。これらの諸グループ・諸都市は互いにある程度の連絡を保ち、危急時には援軍に駆けつけはしたが、通常それぞれの軍事活動は独立しており、合同の活動は見られない。西部のプロテスタント都市は、軍事的統合への積極的な動きを持たなかったのである。東部のプロテスタント地方三部会もこの状態を放任したに止まり、ほとんど影響を与えることはなかった。和平後、国王シャルル9世がトゥールーズに滞在中に西部のプロテスタントは東部とは別に王に代表を送ったが、これは既存の教会組織によって選ばれたものであつた⁽¹⁷⁴⁾。選出されたのは先述のカストル都市総督フェリエールであつたが、それはラングドック西部の地方教会会議によつたのである。これは、都市近隣のプロテスタント貴族の都市との一体性、モントーバンと並ぶカストルの指導的地位などと同時に、西部を代表する統合的な軍事組織の欠如を物語るものであろう。

このような状態に変化の兆しが生じたのは、第二次宗教戦争においてである。この時期、コンデ親王からこの地方の有力なプロテスタントの貴族たちに対し挙兵の命令が下り、彼らが地方の軍事活動の前面に現れることになる。実は、第一次宗教戦争においても命令は下ってはいたが、その挙兵は一部の貴族を巻き込んだにすぎなかった。第二次以後、その動きは地方全体を覆うこととなる。この地方貴族たちは、都市の一部と見なしうる先述の都市周辺の小貴族とはまた別の存在であつた。

いわゆる没落しつつある中世以来の帯剣貴族であり、正規の地方三部会に出席する程の名家ではないが、副伯・男爵等の称号を有し、この地方の貴族社会の中ではそれ相当の地位を享受していた。アルパジョン一族、ポーラン、ブリュニケル、モンタマール、コーモン、モンクラール、ラバンといった貴族たちがそうである⁽¹⁷⁵⁾。彼らはしばしば姻戚関係で相互に結ばれており、軍事行動も共にする傾向にあった。彼らは、西部において歩兵4000名、騎兵500名から成る大軍を組織する⁽¹⁷⁶⁾。兵は主としてカストル周辺から集められ、指揮権を一つに統一することはせず、前記の貴族たちによる一種の集団指導体制が形成された。この軍隊は「副伯たちの軍隊 (armée des vicomtes)」と呼ばれ、前世紀の宗教戦争史において英雄的に叙述され大変有名であるが、西部を軍事的に一体化したのは、まさにこの組織であった。

この体制は和平後も存続したのみならず、都市勢力をも統合し、一層の地域の組織化を進めることとなる。戦争再開に向けて、軍隊維持のための財政機構の整備が必要とされたからである。1567年の始めにカストルで会議が持たれ、軍隊の組織化は一層進められた⁽¹⁷⁷⁾。第三次宗教戦争が勃発した時、地方貴族たちは前回と同様に4000の歩兵と500の騎兵を集めることができたが、歩兵は30の中隊を含む4大隊に、騎兵は竜騎兵中隊と騎兵中隊各三個に、見事に組織されていた。

ところで注目すべきは、西部の地域的統合を実現させたこのカストルでの会議もまた、初歩的段階ではあるが、身分制議會の組織原理を借用している点である。ガッシュは、「四方八方の貴族や都市共同体」に使者が送られ「全貴族と都市の代表 (toute la noblesse et les députés des villes)」が参加した、と述べている。この「貴族と都市代表」という二分法は、第一身分を除いたプロテスタント版身分制議會の典型的な概念であり、既に東部のプロテスタント地方三部会に見られ、後の全国政治會議にも一般的に見られるものであった。

萌芽的な身分制議會とはいっても、東部のそれとは大分様相を異にしていた。主導権を握っていたのはあくまでも地方貴族であり、都市は財政的安定のために下部組織として取り込まれているにすぎない。従来の貴族による集団指導体制がそのまま実質的執行部として残り、それに二名の都市出身の財務官が加えられただけである⁽¹⁷⁸⁾。都市は拠出金の義務を負わされるのみであり、貴族の統制も軍事活動の意志決定への参加もできなかった。ラングドックは地方三部会の伝統の強い土地であったが、西部の貴族は従来都市中心であったこの制度を貴族主導の形に変えて借用しようとしたのかもしれない。いずれにせよ、西部の都市にとって身分制議會による地域の組織化は、結局地方貴族のヘゲモニーの固定化と資金供出の制度化に帰着するものであった。この点において身分制議會を拒絶する規約との間に親和性を見出すことが可能である。

3. 地方貴族と親王

資金供出の義務にもかかわらず、都市は新制度からほとんど益を受けることはなかった。大変皮肉なことに、新たに設立された軍隊は地方防衛を強化するどころか、逆に地域の防衛力を弱める方

向に作用したのである。実は、コンデたちが挙兵を命令したのは、地方のプロテスタントの自己防衛よりも、むしろフランス中央部で何万もの国王軍と決戦を行おうとしている自らの軍隊に援軍を送らせるためであった。そして、地方貴族がこの命令に反応して決起したのもまた、地方の防衛以上にコンデの下で戦うためであった。よく言われているように、没落しつつある彼らは内戦に立身出世の機会を見出そうとしたが、そのためには親王の目の前で手柄を立てることこそ最も望ましかったのである⁽¹⁷⁹⁾。親王の目の届かぬ地方でいくら手柄を立ててみたところで、期待に添う報償を得ることができるかどうかは疑わしかった。

親王への援軍の優先は、地域の兵力の流出を生じさせる。特に、大量の兵を募集するに際し、地方貴族たちは人口に富む都市部でこれを行ったため、都市周辺において兵力の流出が著しく、先述の星雲状都市グループの戦闘力は急速に弱化した。例えば、第一次宗教戦争のことである。オルレ안의コンデの下に馳せ参じたアルパジョンは、郷里に戻り援軍を集めよ、との命令を受ける。彼はモントーバンに入り、ここを足場に1200名の兵を集めるが、当時モントーバンは、国王軍の猛将ブレーズ・ド・モンリュックによる攻囲の危機に晒されようとしていた。しかし、アルパジョンは市の期待を裏切り、これを見捨てて集めた兵とともにコンデの軍の合流する。その結果、モントーバンは残された市民だけの力で攻囲に絶えねばならなかった⁽¹⁸⁰⁾。第二次宗教戦争では、全地域的な「副伯の軍隊」の結成により、この流出の規模は拡大する。軍隊のリクルートは西部全域でなされたが、特にその中心となったのは、カストル周辺であった。4500名からなる軍隊は、結成されるとすぐに北に向かい、シャルトルの決戦を前にコンデの軍と合流した⁽¹⁸¹⁾。第三次宗教戦争においても、事情は同様であり、同規模の軍隊がアングーモワ地方にいた親王軍に加わった。当時、カストル市民ガッシュは次のように述べている。「この強力な軍隊は親王の勢力を強化したが、一方で（この地方の）党派の力を著しく弱めた。それゆえ、カトリックはプロテスタントから多くの都市を奪い取ることができたのである。また大失敗が繰り返された、と人びとは思った。というのは以前の度重なる宗教戦争においても、高^{オー}ラングドック地方では同様の誤りが犯されていたからである」⁽¹⁸²⁾。以上のように、都市の拠出金で設立された軍隊は、結局地方貴族の功名と親王権力の伸張に用いられ、彼ら自身に益するところは少なかったのである⁽¹⁸³⁾。

ところで、新体制が都市に負わせた負担は、それだけではなかった。親王は地方に、援軍とは別に、親王軍維持のための拠出金をしばしば要求した。第一次宗教戦争においては地域が未統合であり、親王権力の地方への浸透は、派遣されたアルパジョンの個人的活動の枠内に止まっていた。彼が拠点を置いたモントーバンに対してのみ、拠出金が要求されたのである。しかし、第二次宗教戦争における地域の組織化は、この地域における親王の集金力をも高めた。地方貴族は親王の集金を仲介し、新体制は親王の集金装置として機能する。地域の組織化により、都市は軍隊創設のための課税と親王への拠出金という二重の財政的義務を負うこととなった⁽¹⁸⁴⁾。以上のように、彼らにとって地方貴族と親王とはいわば共犯関係にあった。地方貴族は親王との直接的関係を保ち、その権威

の下に地方での覇権を正当化し、逆に親王は地方貴族の地域統合によってその権力を地方に浸透させたのである。

第三次宗教戦争の後半、親王軍が南仏に入り、副伯の軍隊もラングドック西部に戻ってくると、親王は手下の有力貴族をこの地方に総督として送り、地方の直接的支配を進めようとした。ピロン、モンゴメリー、ラ・カーズといったプロテスタント陣営の有力者が次々にここに送られている⁽¹⁸⁵⁾。地方貴族たちは、有力貴族と直接の臣従関係を結べることを歓迎した。東部においては、地方は親王からある程度の独立を保っていたが、西部においては地方貴族の功名心を介して親王権力が直接的に地方に浸透することになった。しかし、この地方総督の派遣が、はたして地方防衛を大いに強化したかは疑問である。親王による派遣は永続性がなく、わずか一年余りの間に三名がこの職に就いた。交代は地元の戦況を無視したものであった。初代のピロンは作戦途中にして召喚されたが、これについてガッシュは、彼は「この命令に喜んで従い、党派と地方全体に多大な損害を与えることとなった」と述べている。このような処置が地方における親王への信頼を低下させた、と推測することは十分可能であろう⁽¹⁸⁶⁾。

4、地域統合と都市

地方貴族による集団指導体制の成立は、都市の軍事的自治にも影響を与えずにはおかなかった。その焦点となったのは都市総督の任命権である。地方貴族はこれが自分たちの手中にあると考えており、自治にこだわる市民と対立する。

争いはすでに第一次宗教戦争に始まっていたが、この時期の対立はモントーバンに限定されている⁽¹⁸⁷⁾。コンデから挙兵の命令を受けてこの都市に流入したアルパジョンは、自らその都市の総督を名乗った。モントーバンが自ら都市総督を選任していたことはほぼ確実であるが、地方貴族との間には明らかな身分の格差があり、総督として受け入れざるを得なかったと思われる。しばらくして、アルパジョンは都市を去ってコンデの下に向かうが、この時自分の部下の一人を代わりの都市総督に任命する。この後、都市総督と市民との間には特に課税を巡って争いが頻発し、結局都市は総督を追放している。

第二次宗教戦争における集団指導体制の成立により、対立は全地域的レベルで本格化した。最も明瞭であるカストルの例を参照したい。先述のようにこの都市では、第一次及び第二次宗教戦争において、近隣の小貴族のフェリエールが都市総督に任命されていた。しかし、第二次宗教戦争休戦後、地方貴族たちはボワッスゾンにカストルの都市総督に選び任命する。都市側はあくまでもフェリエールに固執し、結局相譲らず、両名が同じ職に就き一つの評議会を形成する、という極めて変則的な体制が取られることとなった⁽¹⁸⁸⁾。

実は、このボワッスゾンもまたカストル近隣の小貴族であり、第一次宗教戦争以来、カストル防衛においてフェリエールの片腕としてナンバー2の位置を占めてきた男である。そのような人物が

地方貴族によって対抗馬として立てられているという事実は、集団指導体制の成立によって都市周辺の貴族社会に亀裂が生じたことを明示している。実際、従来カストル防衛に参加していた小貴族たちの中に、副伯の軍隊の士官に転身している者が見られる⁽¹⁸⁹⁾。彼らにとって、遠征軍への参加は、地方都市の防衛に比べれば遥かに栄達獲得の好機であった。集団指導体制は都市周辺の貴族たちの功名心に作用し、都市から兵力を吸収する。これが都市の軍事的自治の弱体化をもたらしたであろうことは、想像に難くない。

親王による地方総督の派遣は、この傾向に一層拍車をかけた。都市総督の任命は地方総督の任意となり、もはや都市側の意向は反映されない。地方総督が代わるたびに、都市総督も新任者の好みの貴族に代えられるようになった。

以上、西部のプロテスタント都市は東部のプロテスタント地方三部会に距離を置いたが、一方で親王と地方貴族の手になる身分制的な軍事体制にも反感を抱いていた。都市の民主的・自律的性格や都市を中心にした軍事グループの形成も含め、規約が西部のプロテスタント都市の伝統に連なる可能性は極めて高いと言えよう。

ところで、親王権力はサン・バルテルミーにより一夜にして崩壊し、この権威に支えられていた地方貴族の集団指導体制も解体する。西部のプロテスタントは軍事組織を一から再建する必要に迫られた。では、この時期出現した新組織と規約はいかなる関係にあるのか。次節でこの問題を検討したい。

5、サン・バルテルミー後の都市と新自衛組織

ラングドック西部はサン・バルテルミーの衝撃を最も強く受けた地方の一つである。1572年8月24日にパリで始まった虐殺は、10月3日にトゥールーズに飛び火し、そこからガイヤックとアルビに広がった（10月5－6日）⁽¹⁹⁰⁾。このパニックの中でモントーバンは武装蜂起を決定し、国王の都市総督の受け入れを拒否する⁽¹⁹¹⁾。この動きは他の都市にも広がった。貴族たちは身の安全を求めて、所領からモントーバンや近隣のプロテスタント都市に流入する。一帯はカトリックに制圧され、こうして規約が言うような「都市に置かれた」状態が生じた⁽¹⁹²⁾。

従来の地方貴族たちの活動は、必ずしも都市に深く根を下したものではなかったが、この時期、狭い市壁内で市民と隣合うことにより、その緊張関係はかつてない程厳しいものとなった。先述のように、危機的状況の中で、プロテスタント都市では民主化や都市自治を要求する爆発的な運動が見られた。同じ時期に、市民は都市の自治を軽んじ専横にふるまう地方貴族と直接対峙することになったのである。

少し後の時代になるが、再占領後のカストルの例を見よう。ガッシュの日記の編者であるブラーデルは、この都市ではサン・バルテルミー以後、市民と地方貴族との対立が頂点に達した、と述べ

ている⁽¹⁹³⁾。先述のように、カストルではこの時期急速な民主化が行われた。また、地方貴族と地方総督による軍事的自治抑圧の時代は終わり、再びフェリエールが都市総督が選出されている。この時期、市の自治精神は以前にも増して高揚を見たと思像してよいであろう。一方、地方貴族のポーランは、ここに流入した後に、市の行政権それ自体にさえ干渉しようとする。当時、前任者の死により、カストルのセネショセー裁判所の首席裁判官 (juge mage) の座が空席となり、これを巡って次席裁判官 (juge particulier) とカストル伯領上訴裁判官 (juge d'appaux) との間に争いが起こった。従来市のコンシュルは、この職に関して三名の候補者を王に提示する権利を有していたが、戦時下であるため、和平までの仮措置ということで次席裁判官を首席裁判官に任命した。しかし、当時都市総督であったポーランは、上訴裁判官の訴えを聞き入れ、いわば力づくで次席裁判官を退かせ、彼を首席裁判官に任命したのである。和平後もこの人事は継続されたが、この事件はコンシュルと都市総督の敵対を激化させた⁽¹⁹⁴⁾。

1576年にはコンシュル選挙への干渉が起こる。年度の初め、例年のごとく新たに四名のコンシュルが選出された。おそらく都市総督に従順な候補者が退けられ、敵対的な人々が選ばれたためであろう、ポーランはこの選出に激しく反対し、地方総督に訴える。この訴えは功を奏し、選挙の無効の命令を獲得するが、結局再選挙においても市民が選出したのは同じ四名であった⁽¹⁹⁵⁾。

このように、貴族は市政に干渉し市民と激しく争ったのであるが、同時に市民の目には貴族たちの都市や党派への軍事的忠誠は極めて疑わしいものと映っていた。上記のポーランが引き連れていた貴族たちは、当時の言葉を借りれば「市の利益を顧みようとしない者ども」であった。彼らには多くのカトリックの貴族仲間や親族がおり、それらのカトリックの居城や、当時その地のプロテスタントに最も恐れられていた拠点であるオートリーヴの城にさえ平気で出入りしていた。カストルの市当局は、しばしば彼らの素行についてポーランに不平を訴え、彼らが勝手に敵と通じ合うことがないように要請している⁽¹⁹⁶⁾。当時の貴族の世界は敵・味方に明瞭に二分されるものではなく、党派の鞍替えもまた簡単に起こり得たのである。国王の任命によりカストルの都市総督を務めたこともあるフルクヴォーも、当時のラングドックの貴族について次のように述べている。「多くの貴族は、カトリックと王への奉仕という栄誉を身に帯びているにもかかわらず、卑劣な戦いをを行っている。敵と通じ合うのは日常茶飯事で、共に語り、飲み、食べ、闇取引をし、略奪品を分かち合っている。そして、親族や友人だからという理由で、互いに容赦しているのだ」⁽¹⁹⁷⁾。当時、ガッシュは「外の敵のみならず内側の敵からも市を防衛しようと、カストルの住民は大変苦勞していた」と述べている⁽¹⁹⁸⁾。以上のように、この時期都市内部では地方貴族と市民が、表面的には協同しつつも激しく対立していたのである。

その地方貴族は市民の一部を伴い、主として奇襲により近隣のカトリック都市や城塞を攻撃・占領する⁽¹⁹⁹⁾。こうして貴族たちの軍事活動により、二つの地域的軍事グループが出現した。一つはモントーバンを中心としたものであり、もう一つはカストル周辺に形成されたものであった⁽²⁰⁰⁾。

「1572年の規約」について

同年秋、モントーバングループはサン・アントナンに、カストル周辺のグループはピエールスガッドに秘密裏に会議を開いて組織を確立する。これが先述の新自衛組織である⁽²⁰¹⁾。この新組織は、従来の星雲状都市グループを基盤にした緩やかな都市同盟であり、それまでにラングドックに存在したプロテスタントの諸組織と比較して、最も規約の規程に近いと言えよう。6-7の都市からなり、規約の規模にも近い。従来の都市グループとは異なり、制度として明瞭に組織され、諸都市の上位に立つ中央組織も設定されている。特に注目すべきは、この中央の組織において、規約と同様に軍事司令官の統制というモチーフが明瞭に見られることである。すなわち総会によって司令官(général)が選出されているが、この司令官の監督のために各都市の代表により評議会(conseil)が設けられており、司令官はあらゆる活動に関してこの同意を必要とされている。この組織は、もはや以前の集団指導体制時のような地方貴族の一方的な主導権によるものではなく、都市側の要請を十分に反映したものであった。とはいえ、都市側の論理が全面的に貫徹されているわけではない。例えば、各都市の総督の任命は、その都市自体ではなく選出された司令官によってなされている。また、貴族の選出資格についても曖昧である。ガッシュによれば、ピエールスガッドの会議は貴族代表と都市代表からなっていた。これは身分制議会的な発想であるが、しかし実際には貴族はもはや都市から自由な存在ではなかった。いずれかの都市に活動基盤を置き、都市代表としての性格も有していたのである。おそらく、貴族をあくまでも都市代表の枠内に位置づけ、新組織を都市連合として成立させようとする市民と、身分制的秩序を貫徹させようとする貴族との間に激しい対立が存在したと考えられる。

以上のように、この新組織は当時の都市内部における貴族と市民の対立を反映したものであり、いわば両者の葛藤の産物であった。地方貴族が要求する防衛体制は、おそらくかつて西部で出現した体制と変わらないものであろう。では、都市が理想とした防衛体制はどうか。我々はそのに規約の内容を見ることはできないであろうか。すなわち、貴族勢力の軍事力が各都市の内部に分割して吸収され、地域的組織が全くの都市同盟として成立する方法である。それが実現可能であったか否かはともかくとして、彼らの理想像に極めて近いものである可能性は極めて高いと言えよう。

おわりに

規約は、サン・バルテルミーの直後に、おそらく高^{オー}ラングドック地方(西部)の都市部のプロテスタントが新組織の設立に際して作成したものである。会議で正式に採択されなかったのは、対抗勢力である地方貴族の抵抗によるものであろう。都市と貴族の二元的対立はその後西部において存続し、おそらくそれゆえに規約が、拡張・合併を続ける新組織の正式な議事に上ることもなかった。にもかかわらず、規約は西部の都市の間に理想として強い影響力を残したと思われる。そして、急速に台頭してきたラングドックの新自衛組織と関連させられて、都市や教会を中心として広く流

布したのであろう。あるいは新組織の会議の楽屋裏で密かに伝えられたのかもしれない。

いずれにせよ、規約に示される独創的な民主主義思想が全国政治会議の成立史の底辺に流れていることは、忘れてはならないであろう。

本論で明らかにされたように、高^{オ-}ラングドック地方（西部）と低^バラングドック地方（東部）は異なる伝統を持っており、前者はさらに都市と地方貴族という相対立する世界から成り立っていた。これら諸要素の対立・交流から、いかにして全国政治会議が形成されるのか。それが次に明らかにされるべき課題である。

注

- (130) Jacques Gaches, Ch.Pradel éd., *Mémoires sur les guerres de religion à Castres et dans le Languedoc (1555-1610)*, Slatkine reprint, Genève, 1970, réimpression de l'édition de Paris, 1879-1894, pp.124-127 ; M.-A.-F. Baron de Gaujal, *Etudes historiques sur le Rouergue*, 4 vol., Paris, 1858-1859, II, p.426 ; J.-L.Rigal éd., *Mémoire d'un Calviniste à Millau*, Rodez, s.d., p.245, n. ; Dom.Vic et Vaissette, *Histoire générale du Languedoc*, Toulouse, 1889, XII, p.544 et suiv.; Ménard, *op.cit.*, V.
- (131) ルチスキーは、これに加えてセヴェンヌのサン・ピエール・ド・サルで11月11日に会議が持たれたと主張する。ガール県文書館にこの議事録が残り、それによればサン・イポリットの会議は10月24日に開かれたとのことであるが、この史料は未確認である。
- (132) 注3参照。La Popelinière, *op.cit.*, version de 1581, II, p.142 ; Gaujal, *op.cit.*, II, p.426.
- (133) *ibid.*, II, p.107; Vic et Vaissette, *op.cit.*, p.544 et suiv..
- (134) ガッシュの父は商人で、コンシュルを務めたこともあり、市の中心的プロテスタントの一人。フォーランはプロテスタントの仕立屋。Gaches, *op.cit.* ; Ch.Pradel éd., *Journal sur les guerres de Castres*, Montpellier, 1878.
- (135) ラングドック西部に隣接するルエルグ地方のミヨーは、南仏のプロテスタントの中心地の一つであり、西部のプロテスタントとの関係も深く、軍事的にも同じブロックを形成していた。注130の *Mémoire d'un Calviniste à Millau*によれば、この都市でも、西部と同様の諸特徴が見られる。すなわち市当局と長老会の協力体制 (pp.64 et 97-99), 市民総会の残存 (pp.141,197,217,240 et 256), 都市総督の自主的選出 (p.47) などである。
- (136) J.Garrisson, "La Genève Française, 16e siècle", D.Ligou éd., *Histoire de Montauban*, Toulouse, 1984, p.100.
- (137) *ibid.*, pp.126-8.
- (138) カストルの歴史一般については, R.Cazals éd., *Histoire de Castres, Mazamet, La Montagne*, Toulouse, 1992を参照。ただし、この書はサン・バルテルミー後の市政の民主化については関心を払っていない。
- (139) Faurin, *op.cit.*, pp.60, 61, n.1 et 134, n.; Gaches, *op.cit.*, p.233, n..
- (140) Gaches, *ibid.*, pp.187-189, 187, n.3 et 201, n.3.
- (141) Faurin, *op.cit.*, p.73, n.1 et p.74.
- (142) Ligou, *op.cit.*, pp.118-119, 121-122 et 124.
- (143) *ibid.*, p.188.
- (144) Faurin, *op.cit.*, p.16.
- (145) *ibid.*, p.72.
- (146) Ligou, *op.cit.*, pp.100-101 et 122.
- (147) Faurin, *op.cit.*, p.134, n. ; Gaches, *op.cit.*, p.233.n..
- (148) Gaches, *ibid.*, pp.193-194.

- (149) *ibid.*, p.11.
- (150) *ibid.*, pp.13-14.
- (151) Guillaume de Guillot, Sr.de Ferrières ; Haag, *op.cit.*, V, pp.395-398, article “Guillot”
- (152) Gaches, *op.cit.*, pp.61-62.
- (153) *ibid.*, pp.187-188.
- (154) *ibid.*, pp.73-74.
- (155) 注150参照。
- (156) Garrisson, *Protestants du Midi*, pp.52-56 ; Cazals, *op.cit.*, p.121.サン・バルテルミー直後に、国王側のカストル総督は混乱を予防するため市内での説教を禁じたが、近隣の多くの教会も自発的にこれに倣い礼拝を自粛した。これもカストルの影響力を示すものである (Gaches, *op.cit.*, p.121)。
- (157) 注150参照。
- (158) 注152参照。
- (159) Gaches, *op.cit.*, pp.23-29.
- (160) *ibid.*, pp.61-63.
- (161) 注156参照。
- (162) 近接するルエルグ地方においても、同様の都市グループがミヨールを中心として形成された。ただしこの地では、第一次宗教戦争の初期から地方全体の総督が選出され、彼の下に都市総督だけの会議が結成された (Rigal, *op.cit.*, p.31, 78 et 213)。
- (163) Collection des procès verbaux des assemblées politiques des réformés de France pendant le XVI^e siècle, *Le Bulletin de la Société de l'histoire du Protestantisme Français*, XXII, 1873, pp.506-516 et 546-558 ; XXIV, 1875, pp.314-322, 359-367 et 402-409 ; XXVI, 1877, pp.351-357 et 401-407. 注2 拙稿参照。
- (164) Gaches, *op.cit.*, p.14.
- (165) 1561年、サント・フォアで開かれたギュイエンヌ地方教会会議では、ボルドーとトゥールーズの高等法院の管轄領域に従い、ギュイエンヌ全体を2つの管区に分け、それぞれに総司令官 (chef général) を立てることを決定した。トゥールーズ管区 (モントーバンが属するケルシー・ルエルグ地区を含む) の総司令官に選ばれたのは、貴族マルシャステル (Geoffroy-Astorg-Aldebert de Cardaillac, dit de Peyre, sr. de Marchastel) であり、第一次宗教戦争において、彼はモントーバンを中心にラングドック東部からギュイエンヌ西部一帯にかけて活動する (この時のタイトルは不明。ギャリソンは「モントーバン総督」と考えている)。しかし、実際にはコンデ親王から送られたアルパジョンが地域を統括し、彼もまたフランス西南部全体の首領であるデュラス (Symphorien de Durfort, sr.de Duras) の指揮下に入っていた。Ligou, *op.cit.*, pp.111-112, 117 et 119 ; G.Bourgeon, *La Réforme à Nérac*, Toulouse, 1880, p.84 ; L.Romier, *Le Royaume de Catherine de Médicis*, 2 vol., Paris, 1925, II, pp.264- 5 ; Haag, *op.cit.*, I, pp.130-131, article “Arpajon”, III, pp.212-213.
- (166) Haag, *op.cit.*, IV, p.129, article “Crussol”.
- (167) ガロンヌ川、タルン川の水運により、西部は古代よりこれらの地方と経済的に結ばれていた (Ligou, *op.cit.*, p.99)。
- (168) これは後述の集団指導体制が出現し、この軍隊の取り込みが図られたためである (Gaches, *op.cit.*, pp.68-69)。
- (169) ケルシーの6つのセネショール裁判所の一つがここに座を置いていた。 *La Grande Encyclopédie*, Paris, s.d., XXVII, pp.1132-1133, article “Quercy”.
- (170) 十五世紀末より、モントーバン司教が、個人的にラングドックの地方三部会にも加わるようになったため、同三部会の慣例に従い、第三身分も代表を要請された。慣例では、教区代表とは別に、司教座都市も独自に代表を送ることになっているが、モントーバンは16世紀初頭になっても自身の代表を送っておらず、教区代表一名が出席しているのみである。H.Gilles, *Les Etats de Languedoc au XV^e siècle*, Toulouse, 1965, pp.81, n.3, 97 et 99 ; Dognon, *op.cit.*, p.256.
- (171) Ligou, *op.cit.*, pp.122 et 126.

- (172) *ibid.*, p.119.
- (173) *ibid.*, pp.114-115.
- (174) Gaches, *op.cit.*, pp.50-51.
- (175) アルバジヨン, Antoine et Jacques d'Arpajon, baron d'Arpajon, (Haag, *op.cit.*, I, pp.130-132) ; ポーラン, Bertrand de Rabasteins, vicomte de Paulin (Haag, *op.cit.*, VIII, pp.340-344) ; モンタマル, Bernard d'Astarac-Marestaing-Fontrailles, vicomte de Montamar (Haag, *op.cit.*, I, pp.142-144), サン・バルテルミーで死 (Gaches, *op.cit.*, p.66.n.5) ; コーモン, Jacques de Casterverdun, vicomte de Caumont (Haag, *op.cit.*, III, pp.244-246) ; モンクラール, Antoine Montclar, vicomte de Montclar ; ラパン, Philibert ou Philippe Rapin.
- (176) Gaches, *op.cit.*, p.65.
- (177) *ibid.*, pp.74-76.
- (178) 東部においては国王役人が地方三部会の実権を握っていた。西部でもトゥールーズ高等法院からカストルに亡命した評定官たちを中心とした法曹家グループが存在したが、親王と直接的関係を持つ一方で、都市の内政や地域的統合にはほとんど関わっていない。*ibid.*, p.75; S.Capot, *Justice et Religion en Languedoc au temps de l'Edit de Nantes, La chambre de l'Edit de Castres (1579-1679)*, Paris, 1998, pp.46-51.
- (179) 例えば, 1572年にカストル, ナルボンヌ, モンブリエの司教区の状況を報告したフルクヴォー (Raymond de Pavie, baron de Fourquevaux) の証言を参照。これは, ガッシュ, フォーランと同様に, 当時のラングドックの基本史料である。Ph.Wolff éd, *Documents de l'Histoire du Languedoc*, Toulouse, 1969, p.204.
- (180) Ligou, *op.cit.*, pp.111-113.
- (181) Gaches, *op.cit.*, pp.65-68.
- (182) *ibid.*, p.78.
- (183) ルエルグ地方でも同様の事態が生じた。あるミヨー市民はこれは, 「市に対する悪意である」と述べている (Rigal, *op.cit.*, p.196)。また, 親王の命令を受けたことを口実に, 同地方の総督アルバジヨンは400名の軍隊を地方に設立させ, これを引き連れアジャン付近まで遠征したが, 市民は, これを自己の名誉欲のためとみなし, 激しく非難している。「彼はそれほどまでに強欲に支配されていた。というのは, 地方にすべてを支払わせようとしたからである」(*ibid.*, p.182)。
- (184) Gaches, *op.cit.*, p.74.
- (185) *ibid.*, pp.83,89-92 et 107 ; Foucault de Gontaut, baron de Biron ; Jacques de Lorges, comte de Montgomery ; Pontus de Pons, sr.de La Caze.
- (186) 地方総督は地域の貴族社会の実情を無視して穏健派のカトリックにも攻撃を加えたので, 地方貴族の間にさえ批判が生じた。ガッシュによれば, 「この地方の貴族たちは彼 (ビロンー筆者) が思慮なくカトリック貴族の家を攻撃するのを苦痛に思った (*ibid.*, p.89)」。また, 地方総督のラ・カーズはルエルグ地方に援軍に出かけたが, あるミヨー市民は「何ら益をもたらさず, ただ六日間市を苦しめただけ」と記している (Rigal, *op.cit.*, p.213)。
- (187) Ligou, *op.cit.*, pp.111-112,117 et 119.
- (188) Gaches, *op.cit.*, pp.73-74; Antoine Peyrusse, sr.de Boissezon.
- (189) 例えばモンルディエ (François de Villettes, sr.de Montledier) がそうである。Gaches, *op.cit.*, pp.13-14, 61-62 et 76 ; Haag, *op.cit.*, IX, pp.503-504, article "Villettes".
- (190) A.Jouanna, J.Boucher, D.Biloghi et G.Le Thiec, *Histoire et dictionnaire des guerres de religion*, Paris, 1998, pp.1262-1264.
- (191) "Lettre de Villars au Duc d'Anjou, le 6 octobre 1572", *Bulletin de la Société de l'histoire du Protestantisme français*, XXII, 1873, p.256 et suiv. ; La Popelinière, *op.cit.*, II, pp.87 et 114 ; Goulart, *op.cit.*, version de 1578, II, pp.114 et 176 ; Gaches, *op.cit.*, pp.112-117.
- (192) 近くに安全な都市がなく山中に逃げ込んだプロテスタントも多かった (Cazals, *op.cit.*, p.123)。また

「1572年の規約」について

この時期、外国のプロテスタント勢力の援軍が期待されていた (Faurin, *op.cit.*, p.64)。カストルの長老会は、規約と同様にこれが神の怒りによるものと捉えている (Gaches, *op.cit.*, pp.113 et 115)。

(193) *ibid.*, pp.210.n..

(194) *ibid.*, pp.192-194; Cazals, *op.cit.*, p.126.

(195) Gaches, *op.cit.*, p.223, n..

(196) 注193参照。

(197) この報告がなされたのは、同じ1572年である (Wolff, *op.cit.*, p.204)。フォーランは、12月の時点で国王任命のカストル総督がフルクヴォーだったと述べているが (Faurin, *op.cit.*, p.64)、ガッシュにはその記述はない。

(198) Gaches, *op.cit.*, p.210. 第一次宗教戦争期のモントーパンの攻囲時にも、地方貴族に任命された都市総督が敵と内通するという事態が生じている (Ligou, *op.cit.*, p.113)。また、このような貴族の横暴による都市との対立は、ルエルグ地方においても絶えず見られ、都市による都市総督の追放もしばしば生じている (Rigal, *op.cit.*, pp.154, 185-186, 196, 213)

(199) Cazals, *op.cit.*, pp.129-131.

(200) レアルモンやロッククルブ、及びカストル市民が亡命したビュルラなどを中心としたもので、カストル自体は1574年までカトリックの制圧下にあった。

(201) 注130参照。